

森林吸収源インベントリ情報整備事業ブロック別地域講習会 西日本ブロック(関西)

開催日:2012年 7月 10日(火)

場所 京都市右京区京北田貫町

(調査地点コード 260190)

講師 三浦・池田(森林総研本所)、谷川(森林総研関西支所)

#### ○概要

中部・近畿ブロックの新規参入業者(株)一成の担当者3名を対象に地域講習会を実施した。梅雨の合間のよく晴れた日で、講習対象調査地はスギ・ヒノキの間伐跡地で林内が見渡せるため説明がしやすい林分であった。

朝8時半少し前に道の駅「ウッディー京北」にて一成の担当者と合流した。一成号と森林総研号の車2台で出発し、5分程度でチェーンで車進入を止めている林道入口に到着した。車はチェーンの前に置き、徒歩2~3分程度で調査地に到着した。

第一期野帳には傾斜が50度と記載されていたため記載ミスかと話していたが、谷壁斜面下部に位置し実際に60度に達する急斜面もあった。足場が崩れやすいこと、林床には切り株や伐倒木が大量に存在していたことから、難易度の高い調査になると予想された。

初めの枯死木測定ライン張りは、多摩の講習会を受講した担当者の指示が的確で、講師の現地指導もあったもののほぼ担当者だけで行われた。9:20AMには張り終わり、林相写真を撮り始めた。9:30AMには担当者1名に講師(池田)がついて枯死木ラインインターセクト法調査を開始した。2人目の担当者は、10:10AMには1断面を掘り終わった。この頃、3人目の担当者が別の断面を掘りはじめ、3名の担当者が分かれて、良い時間配分で調査が進んでいった。10:45AMには担当者1名と講師(池田)で引き続き根株・立枯木の全数調査が開始された。初めの断面では、11:13AMにはリター採取が行われ、12:15PMには1つ目の0-5cm深の円筒を取り終わった。この時点で昼食をとった。

作業は順調に進んでいるかに思われたが、この時点で円筒が1つしか採れていないことに気がついた。円筒採取の手際は数をこなした慣れによるところが大きい。礫に富む本調査地での円筒採取は初心者には難しく、杵の挿入から上下面を平坦に削るところまで、午後にかけてもすべての断面で最も時間を要する作業となった。

昼食後12:45PM、講師(三浦)が堆積有機物層、とくにH層の観察会を行った。H層あるいはH層相当の物質は、直下のA層に比べて色相が赤味を帯びており軽いこと、堆積有機物が厚く堆積しているところではよく出現することを学んだ。

1:00PMより午後の作業を開始した。礫と粘土で「欠け」が出やすく円筒採取が難しい土壌であったため、スピードアップの目的も兼ねて、講師が(谷川・三浦の順に)円筒採取の見本を見せた。その際、最初に粘土質の土壌がコポリと外れる「欠け」が生じ、次に円筒の下面整形の段階では礫外れによる穴が開くことが避けきれず、対処法を説明しながらの作業となり、想定していたよりも時間の節約ができなかった。

3:00PMには3つ目の断面が掘り終わり、リターの回収まで終了した時点で3:30PMを回ってい

た。

4:00PMには最後の断面が掘りあがった。礫が多く円筒採取が困難な土壌ではあるものの、上手に行えば採取出来た可能性もあったが、一成の受託林分数が120に上るとも聞いていたので、最後の断面では今後必ず必要になると考えられるブロックサンプリングを行った。別の断面において作業していたためにその様子が見られなかった担当者1名には、作業後に講師(三浦)が概要を説明した。

埋め戻しを終えて、カテゴリA に関する全現場作業が完了したのは17:46PMであり、駐車スペースに戻った後、10分程度講師からの総評およびアドバイスをを行い、解散となった。土壌調査は初めての業者と聞いていたが、すぐに慣れた手つきで作業していたので、精度のよい試料採取が期待できると考えられた。土壌調査未経験者にとって、マニュアルの記載内容は膨大であり難解であると考えられるが、現場に出た後に読み返すことで、内容がより理解できるとの講師の談話があった。

もれなくマニュアル化すること(指導者側)、それを読む込むこと(受託者側)は、いずれも容易な作業ではないが、インベントリ事業の目的の達成のためには共に不可欠であるとの認識を、講師連は帰路の車中で深めた。



現地入りの様子



Nの断面



林相写真撮影の様子



急斜面での作業の様子